

讀金剛般若波羅密多、按波羅密譯到彼岸、則彼岸會名依般若經而起乎、然延曆二十五年春分中日、彼岸會之始也、この説用ゆべし、曆林問答集、假名曆注などいへるものにも、春秋何の故に彼岸といふ事をゑるさず、先にのする彼岸の説をあばせ見て、始めて曆に彼岸をのするのゆへしを詳にせり、

〔延喜式主税二十六〕凡諸國春秋二仲月各一七日、於金光明寺、請部内衆僧、轉讀金剛般若經、其布施三寶綿十屯、僧各布一端、但供養用本寺物、若無國分寺、及部内無物寺者、并用正稅、

○按ズルニ、金剛般若經ハ、具ニハ金剛般若波羅蜜經ト云ヒ、略シテハ金剛經ト云フ、金剛經略疏ニ云ク、波羅蜜亦梵語、此云彼岸到、意以生死爲此岸、煩惱爲中流、涅槃爲彼岸、全由般若爲之舟楫、乃能離生死岸、渡煩惱流、而登涅槃岸也、ト、此經ヲ轉讀セシメシ意以テ觀ルベシ、

〔類聚三代格三〕太政官符

應五畿内七道諸國轉讀金剛般若經事

右被右大臣王、宣稱奉爲崇道天皇親王、令永讀件經者、宜使國分僧春秋二仲月別七日存心

奉讀之經、并僧數附朝集使言上、其布施者、三寶調綿十屯、衆僧各調布一端、自今以後、立爲恒例、

延曆廿五年三月十七日後紀十三、又見日本

彼岸例

〔源氏物語二十九〕かくのたまふは、二月ついたりちごろなりけり、十六日行幸ひがんのはじめにて、いとよき日なりけり、ちかう又よき日なしと、かうがべ申けるうちに、略下

〔源氏物語四十七〕廿六日、ひがむのはてにて、よき日なりければ、略下

○按ズルニ、角總卷ハ、細流ニ、薰廿三歳の秋より、冬までの事也トアレバ、此ひがんに、秋ノ彼岸ナリ、

〔台記〕久安六年二月十九日、丙寅、自今日七ケ日、彼岸彼潔齋夜前沐浴後、服、於不動尊銀三寸像件像、去十日鑄之、